

## 崇仁小学校をわすれないためにセンター

### 2020 年度活動報告

2020年3月20日から31日にかけて「崇仁小学校展：記憶のひきだし 見返りすうじん」を元・崇仁小学校にて開催した（主催：京都市立芸術大学・崇仁小学校の記録と記憶を継承するプロジェクト／共催：崇仁自治連合会・崇仁発信実行委員会）。京都市立崇仁小学校は、1873年（明治6）に柳原小学校として創立され、2010年（平成22）に閉校した。2023年度の京都市立芸術大学および京都市立銅駝美術工芸高等学校の移転に向け、2021年度から解体作業が開始されたため、本展は多くの人にとって崇仁小校舎に触れうる最後の機会となった。

同展では、①美術家伊達伸明氏が制作した巨大な顔面立像《ミカエルさん》の展示、②創立から現在に至る歴代校舎の写真や設計図・崇仁教育に関する資料展「崇仁小学校をわすれないためにセンター」、③来場者それぞれが思い出深い校舎の一角にシールを貼っていく参加型展示「校舎のかけら—ここで何があった？—」、④崇仁小学校の卒業生・教員の写真や現在の崇仁地域を伝える資料の展示、⑤崇仁小をアトリエとして利用した劇団三毛猫座の舞台美術・衣装展、等を開催した。COVID-19による最初の緊急事態宣言直前の開催となったため、人が集まるイベントは行わず、モノの展示を中心に実施した。会期中は校内を解放し、卒業生や地元の方たちをはじめ京都芸大関係者や学外・地域外の方々など、多数の来場者があった。なお本展については、記録集の配布、校舎の一部を再活用して伊達伸明氏が制作したウクレレのお披露目（「建築物ウクレレ化保存計画」）、卒業生や地元の方々に贈るための記念品の頒布会などを年度末に行う予定だったが、再び緊急事態宣言が出たため次年度に実施を延期した。

校舎の解体作業は、2020年8月24日から開始された。崇仁小の跡地をふくめた建設予定地は現在は、更地になっている。解体の様子は許可をとって映像および写真で記録し、本センターにて保管している。

ちなみに2020年には東京オリンピックの開催が予定されていたが、崇仁地区はオリンピックとも無縁ではない。崇仁地区では、1964年10月1日に開業した東海道新幹線の建設（同10日より東京オリンピック開催）のために、数多くの住宅が除却されている。2度のオリンピック開催に合わせたかのように崇仁地区が「更地」となり、町の風景が一変したのは偶然ではないのではないかと。

柳原銀行記念資料館の2020年度企画展「夢の新幹線、苦悶の住宅建設運動～自主映画「東九条」の世界3～」（主催：京都市／柳原銀行記念資料館運営委員会、2021年3月3日～31日）は、こうした都市の度重なる「再開発」について考える試みである。この展示では、新幹線開通以前の崇仁地区やその周囲の様子を記録した写真や映像を展示する。2021年の崇仁地区に広がる空隙の真ん中で、住宅改良事業が本格的に実施される以前（1950年代末ないし60年代初頭）の濃密な都市の風景を見ることは、「今ここ」にある場所がもつ意味について考えるための絶好の機会となるだろう。それはまた、「戦後日本の復興」の象徴であり「震災からの復興」をテーマとしたはずの、「2つの東京オリンピック」の意味について再考する機会にもなるはずである。

復興とは何か。開発とは何か。「見返りすうじん」展は、解体が予定されている校舎のなかでかつての校舎の風景を見る展示だった。「夢の新幹線、苦悶の住宅建設運動」展は、幾重にもわたって解体された住宅の

跡地で、それらの開発の前にそこにあった住宅のすがたを見るものとなる。「今ここ」の現在を、別の歴史の可能性を通して考えるという意味で、両者は通底しあうものとなるだろう。

本プロジェクトでは2021年2月から3月にかけてこれら古い写真群のデジタル化と整理作業を行い、同展示の会場設営に協力する予定である。

佐藤知久（資源研究センター教授）